
アン サイエンスト

山本太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アン サイエンスト

【Nコード】

N4392Q

【作者名】

山本太

【あらすじ】

長年続いた魔法の世界に科学が発展する。

キルクは魔法使いの街で育った少年だ。

幼いころに死んだと思っていた父親が生きていることを知ったキルクは、

父親を探すために家を後にする。

1話

誰もが魔法と呼べる不思議な力を使えた。誰もが子供の頃から学問を学び、魔法の使い方を学んだ。なにもないところから火を起したり、水を出したり、風を起こしたり、手を使わないで物を浮かすことできた。だが、誰しも得意不得意というものはある。数学が得意な者。運動が得意な者、そして、魔法が得意な者。頭脳明晰な者学問を学び科学者へと成長していく。魔法が得意な者は魔法の力を鍛え魔法使いへと成長していく。

キルクは外が明るくなったのを感じて目を覚ました。もう朝か。最初はそう思ったがどうやら違うらしい。朝ならば小鳥が朝が来たと鳴き知らせてくれるはずであるが今はそれがなかった。代わりに爆発音が遠くから聞こえてきた。

キルクはベッドから立ち上がり窓を開ける。目に飛び込んできたのは暗闇の中遠くで輝く炎だった。いつもならそこに隣町が見えるはずだった。今は街の代わりに炎がそこにたたずんでいる。

「父さん！母さん！」

キルクは窓を開けたまま体を反転させ、叫びながら階段を駆け下りて行く。一階では父さんと母さんが丁度ベッドから体を起こしたところだった。

「今の音は？」

母さんが寝起きにもかかかわらず目を大きくさせている。

「ソーキンが・・・」

階段を駆け下りたからか、息が上がって次の言葉がすぐに喉から出てこない。

「燃えてる。」

息を整えやっとな状況を説明する。父さんは体をベッドからほおり

投げると二階へと駆け上っていった。母さんはベッドの上で固まってしまっている。

「キルク！」

二階から父さんの声が響いた。キルクは声のした二階へ上がろうと階段へと向かう。が、すでに父さんは階段を半分以上下りているところだった。

「あとは頼む！」

そう言う父さんはキルクとは目を合わさずに横を通り過ぎると玄関の扉を思い切り開け、家を飛び出して行った。「あとは頼む！」だって。それはキルクに言ったのか母さんに言ったのか解らなかつた。

「お父さん・・・」

母さんが開いたままの玄関をぼうつと見ている。キルクは玄関の扉を閉めると、母さんの座るベッドに腰掛けた。お互いになにも言えずただ座って不安な気持ちと格闘する時間が朝まで続き、次には父さんが帰ってこない苛立ちと同居すること一日。「あとは頼む！」これがキルクが聞いた父さんの最後の言葉になる。キルク十一歳の夏のことだった。

キルクは十七歳を迎えていた。体格は大人と大差ないほどまでに成長しており、余計な肉の付いてない理想の体系と言って良いだろう。

「母さん。俺、明日家出るよ。」

母さんと二人で囲む夕食。半分ほど食べたところでキルクは小さく言葉を放った。

「そうかい。なんとなく解つてだよ。」

反対されるかとも思ったが、あっけなく母さんはキルクの提案を呑んでくれた。

「あの人、連れてきなよ。」

母さんは少し嫌そうな顔をするも、ありがとう。と言った。あの人は母さんの新しい恋人だった。半年前から付き合いだしたのだと二十日前キルクの元へ母さんが紹介してきた。そのとき、キルク母さんの新しい恋人なんて信じられなかったし受け入れることもできなかつた。新しい恋人がキルクに挨拶をしようと一歩前に出たとき、キルクは思い切り殴りかかっていた。新しい恋人の無防備な頬に握り拳がめり込むこととなる。

「あのときはごめん。」

これは新しい恋人を思い切り殴ってしまったことに対しての謝罪だった。本当は本人にするのが良いのだが、気持ちの整理がついた今でも顔を合わせたくはなかつた。

「良いよ。もう気にしてはいないから。」

母さんは目を合わせずに言った。言葉の感じからあの事件のことは心に嫌な思い出残っているのが解る。

「ごちそうさま。」

まだ少しご飯は残っていたが、この場所に居たくない気持ちのほうが強かった。食器を台所に下げ二階の自分の部屋へと向かう。途中母さんをちらりと見たが下を向いたままゆっくりとご飯を嫌そうに口に運んでいた。住み慣れたこの家とも明日で最後になるのかと思つと感傷的になり、涙が出そうになるのをこらえていた。

二階の部屋は今日片付けをしたため、小ざつぱりしていた。いらぬものは全部投げた。今残っているものはベッドとデスクにイス、そしてキルクの手荷物がデスクの上に置いてある。これも明日になればこの部屋から居なくなるものだ。キルクは長年お世話になつたベッドに体を任せた

2話

キルクはソーキンの街に来ていた。この街が襲われてからすでに六年。あの事件ではこの街の住民の半数近くが命を落としていた。それでも月日の経過の力で街はほぼ再興している。キルクは朝母さんと顔を合わせたくなかったため早く起きて家を出てきた。そんなキルクの行動が母さんには分かったのか、玄関には「キルクへ、」と書かれた紙袋が置かれていた。中には母さんの二月分の給料に当たる金額が入っていた。キルクはそれを見たとき涙が零れるのを止められなかった。

この街にキルクが来たのは合いたい人が居たからだ。キルクにとって親戚に当たる人で、名前はゴーゴリオ。確かもう50歳くらいになるはずで、昔からゴーおじさんと言って慕っていた。何度か来たことがあるためゴーゴリオの家には迷うことなくたどり着くことができる。辺りの家に比べて年期の入った家がゴーゴリオの家で、町が襲われたときにも残った数少ない一つだった。その古びた扉をゆっくりと明け中を覗きこむ。

「おはよう。キルクです。ゴーおじさんいますか？」

キルクの声在家中で反響し、キルクの耳へと返ってくる、

「キルクか、久しぶりだな。遠慮しなくていいから入れ。」

キルクの声に続いて、野太い声が家の中に響き渡った。キルクは扉を開け中に入る。そこには体の大きいヒゲ面のゴーゴリオがソファに座っていた。

「お久しぶりです。元気ですか？」

もう一年以上顔を合わせていなかったためか、少しゴーゴリオが老けたように見えた。

「体は元気だぞ。だがこっちは元気じゃないな。」

満面の笑みを浮かべながら右手で親指と人差し指で輪を作る。お金という意味だ。

「そろそろキルクも仕事しなきゃならない年になるんだな。魔法使いはやめたほうがいいぞ。もう昔みたいにはいかないからな。」

キルクもゴーゴリオも魔法使いの家系だった。親から知識と技術を学び、それを後世に伝えてきた。今は科学が進み、学問ができる人が重宝される世の中になってきている。少し前は、火を起こすのも、物を運ぶのも、なにもかにも魔法使いの仕事だった。それが火を点ける道具ができ、車が発明され、今度は空を飛ぶ物が開発中だと聞いたことがある。魔法使いとしての仕事が昨今激減してきている。

「それでも俺は魔法使いになるよ。そのために今までやってきたんだから。」

それを聞いてゴーゴリオは一瞬嬉しそうな顔をするが、すぐに険しい顔になる。

「そうか。大変だぞ。間違ってもお前の親父みたいなことにはなるなよ。」

険しい顔から今度は悲しそうな顔になる。

「ゴーゴリオ。今日は父さんの話を聞きたくてここにきました。」

「昔話か、デニスは優秀な魔法使いだったからな。皆も知っている英雄だぞ。どの武勇伝を聞きたい？」

ゴーゴリオの笑顔の向こうに悲しみが見える。キルクは質問で返した。

「父さんは生きていますか？」

ゴーゴリオの笑顔がぴたりと止まった。

「デニスはあの夜に死んだよ。」

目線を下に向け呟く。間髪入れずキルクは叫んだ。

「いや、違う。父さんは生きています。ゴーゴリオが母さんと話をしているのを俺は聞いていたんだ。」

ゴーゴリオの顔つきが変わった。あきらかにキルクを睨んでいる。まるで別人のように恐い顔をしているゴーゴリオの迫力にキルクは怯み、後ずさってしまった。それを見たゴーゴリオは諦めの表情を

浮かべた。

「そうか、聞いていたのか。」

キルクは黙ってゴーゴリオを見つめている。父さんのことを話してくれるのを待っていた。

「あの夜の話しよう。少し長くなるから飲み物でもどつだ。」

そういつとゴーゴリオは左手を軽く持ち上げると冷蔵庫へと指先を向け、手をゆっくりと手前へと引く。すると冷蔵庫の扉が手と同じ速さで開いた。次にまた左手を軽く動かすと冷蔵庫の中から缶ジュースがふわりと宙に浮かび、二人の前へとゆっくり飛んでくる。

「こんな力じゃ何の役にも立ちやしなかったんだ。」

ゴーゴリオはそう言つと缶ジュースを開け、一口つける。そして、あの夜のことをゆっくりと話し出した。

3話

ゴーゴリオは爆音で目を覚ました。なにがあつたかと家から飛び出すと、街の中は炎の灯りと熱で包み込まれていた。ついに戦争が始まったのか。ゴーゴリオは確信する。街の真ん中に公園がある。緑豊かで池もあり、昼間では子供達がよく遊んでいる場所だ。そこは街の緊急時には皆が集まる場所になっていた。ゴーゴリオはそこに向かつて走りだした。五分も走れば公園までつくだろう。公園までつくまでの街並みは酷いものだった。家は崩れ落ち、人がパニックを起こしている。

「皆公園に集まれ！」

ゴーゴリオは叫んだ。人が多すぎる。全員を先導するのは無理だと感じた。そのとき、目の前に子供が倒れているのを見つける。十歳くらいの子だろうか。ゴーゴリオはその子供に駆け寄った。

「大丈夫か？」

だが、返事はない。息はしているか？口に耳を預ける。小さな息遣いが耳の奥まで入り込んだ。大丈夫だ。生きている。

「しつかりしろよ！」

そう言うとゴーゴリオは辺りを見回す。この子供の家族を探す、それらしい人は見えない。近くに見えたのは崩れた家だけだ。この家の子供だろうか。この家の崩壊のしかたでは残された人は助からないではないか。そう思うがゴーゴリオは少ないほうの可能性に望みを求めた。子供と崩れた家の間に立つと両手を前に出す。子供くらしいの大きさの瓦礫が二つ宙に浮いた。手を外側に、なにかを放り投げるような動きをすると、瓦礫もそれに応えるように横へと動き地面に落ちた。ゴーゴリオはそれを何度も繰り返す。まるで子供が気に入りのおもちゃを探すため、ほかのものを回りに散らかしていくような動きだ、動きが止まった。目の前にソファーくらいの大きな瓦礫が見える。とても大人一人の力で動くようなものではなかつ

た。ゴーゴリオはそれに両手を向け、ゆっくりとそれに力を込めた。すると瓦礫はゆっくりと宙に浮く。だが、さっきまでの瓦礫とは違い、簡単にはいかない。あまりの重さにゴーゴリオの顔がゆがむ。それでもゆっくりと体ごと両手を横に回すと、瓦礫の山からそれを取除くことができた。ゴーゴリオはそこで中に人影が見えた気がした。魔法を使い体に負担が残っているなか瓦礫の中へと入っていく。そこには信じたくない光景が広がっていた。ゴーゴリオは体の前で手を合わせ目を瞑る。きびすを返し子供のところへと戻ってきた。まだ意識はない。ゴーゴリオは子供を背負うと公園へと向かって走りだした。いくら子供だと言っても背負えば重荷になる。走るスピードはあからさまに落ちていた。辺りでは魔法で水を出し、家の消化をする者が見える。協力したい気持ちはあったが、それよりも背の中の子供を早く公園へ運ぶという判断をする。

ゴーゴリオは公園へと向かってひたすらに走り続けた。公園につくと、そこには街の人が集まっている。泣いている者、怒り叫んでいる者、黙っている者、様々だ。公園の中でもとくに人が集まっているところを見つけると、そこに向かって進む。男達がなにやら言い争いをしているように見えた。

「どうなっているんだ？」

ゴーゴリオは人ゴミの中を割って入り皆に問いかけた。皆がゴーゴリオを見る。

「大丈夫だったか？」

小さな男がゴーゴリオの安否に嬉しそうに声を出す。

「ああ、俺は問題ない。それよりもこの状況はどうなっているんだ？」

今度は目の前の小さな男だけに問いかけた。

「サジンが攻撃してきた。」

小さな男が真っ直ぐにゴーゴリオを見ている。サジンとは科学者が多く居る街だった。科学の進歩が魔法を凌駕するようになってくると、生活の道具を作っていたのが、戦争の道具を作るようになって

てきた。前までは魔法使いがサジンにも居て街の警護をしていたのが、今では科学で生み出されたピストルの普及で魔法使いは用無しになっていく。今では科学の力がサジンを支えていた。それに比べソーキンの街はまだ魔法使いが重宝されていた。科学の力も入ってきてはいるのだが、住民のほとんどが魔法使いということもあって科学に頼り切るといふまでにはいたっていなかった。

「戦力は向こうが上だろう。」

ゴーゴリオは呟いた。あまり大きな声ではなかったが、周囲の人々には聞こえていたようだ。ゴーゴリオは背中に子供を背負っているのを思い出した。辺りを見回し、寝かせるのに良いところを探すが、どこを見ても適当なところが見つからない。

「トームス。この子をどこかに寝かせたいんだが、どこか場所ないか？」

目の前の小さな男に問いかけた。

「それならこっちが良い。」

トームスはそう言うと、ゴーゴリオにとって右のほうへと歩いていく。少し歩くと林があり、その下は草が生えている。寝かせるのに最適とは言えないが、さっきの人ごみのところよりは良い。

「この子供どうしたんだい。」

子供を下ろすゴーゴリオにトームスは問いかけた。

「親がね・・・」

ゴーゴリオはそれだけ言う。トームスはそれだけで事態を察した。

「トームス行こう。街を、住民を守らないと。」

ゴーゴリオは近くに恰幅の良い女性を見つけた。その女性に子供を半ば強引に任せるとさっきの人ごみの中へと戻っていく。

「サジンはどっちにいる？」

「あっちさ。」

ゴーゴリオの問いにトームスは指で示した。なるほど。街の表の入り口とは反対側か。「そうか。そしたら俺も行こう。」

いきなりゴーゴリオの背後から声が聞こえ驚いて振り返った。

「デニス。おまえ・・・」

そこにはデニスという男がいた。この男がキルクの父だ。

「皆で対抗すればなんとかなるさ。皆行こう。」

デニスの声は人々が好き勝手喋る公園の中でもよく通った。皆がデニスの声に耳を傾ける。それもそのはずである。デニスはこの地域では名の通った男だった。この事件よりさらに前、サジンとの戦闘があった。まだ科学がそれほど重宝されていない頃戦闘は魔法使いの独壇場だった。その中でもデニスは戦場では誰よりも活躍をした。活躍をしたというのは多くの人を殺したということだ。味方からすれば頼りになるものの、敵からしたら顔を合わせたくない男だ。その時の記憶が皆に頭から消えてはいない。

「行こうゴーゴリオ。」

デニスはゴーゴリオの背中をポンツと叩いた。さっきまで子供を背負っていたところだ。この手にかかれれば子供なんて虫を潰すかのように簡単に殺してしまうのだろう。デニスがゴーゴリオに声をかけたのは他にもない、その前の戦闘のときにデニスと一緒に活躍した男だからだ。デニスと比べると見劣りするかもしれないが、ゴーゴリオは一級の魔法使いだ。デニスの活躍もゴーゴリオが背中を守っていたいからと言える。

「死ぬなよ。家族のためにもな。」

「誰に物を言っている?」

二人はこの戦闘の真っ只中にもかかわらず笑い合った。

二人だけが別世界にいるかのようなようだ。同時に笑いを止めた。遠くでまた爆音が聞こえたからだ。

「あつちだ!行くぞ!」

デニスの声を合図に二人は駆け出した。後ろから街の男達も後に続く。向かう先はサジンの部隊がいる街の裏口側。地獄絵図のような街並みを進み丁字路に差し掛かったとき、デニスがいきなり足を止めた。そして一歩後ろに下がる。皆もそれに合わせて急停止するためぶつかりそうになった。

「ここの先にサジンがいる。」

デニスがT字路の左を指す。

「二手に分かれよう。ゴーゴリオはここで待っていてくれ。俺は部隊の裏に回り攻撃をしかける。そして部隊の意識が裏に向いたとき表からゴーゴリオが攻撃してくれ。皆も二手に分かれよう。」

そう言うのとデニスは男達の半数を連れ、今来た道を戻っていく。

デニスの方には街の地理に詳しいトームスもいるので迷うことはないだろう。ゴーゴリオはT字路から覗き込みサジンの部隊の様子を伺った。大部隊だ。つい口に出してしまう。距離にしてまだ100Mはあり、兵士達の手にはライフルが見えた。生身の人間ならあつという間に動かぬ物へと変えられてしまっただろう。人数にして100人は下らない。いま攻撃を仕掛けようとする街の者は全部で50人くらいだ。その差2倍。不安な気持ちが大きくなりそうになる。その時サジンの部隊の後方で火の手が上がった。間違いない。デニスだ。ゴーゴリオは確信する。部隊が慌てているのが見える。部隊の者が後ろを向きデニスの攻撃に気を取られていた。

「デニスの攻撃が始まった。」

振り返り後ろにいる街の人達に伝える。大きな声で発破をかけたかったが、もしサジンの部隊に気付かれたら元も子もない。ゴーゴリオの声にやる気を見せる者もいたが、恐怖で顔を歪めているものもある。

「俺が道の左側から先に攻める。皆は道の右側から攻めてくれ。」

これはゴーゴリオが先に部隊の前に顔出しおとりになるうということ。そうすれば街の男達の恐怖が少なくなればと思ったのだ。

「皆行くぞ。」

ゴーゴリオは言い終わると同時に両手を後ろに向けた。ゴーゴリオの背中で空気の流れが変わる。風がゴーゴリオをT字路へと勢い良く押し出した。まだ部隊はこちらに気付いていないみたいだ。ゴーゴリオは飛び出した勢いそのまま道の左端までくると、部隊に向け一直線に突き進む。途中後ろを振り返り街の者たちの様子を伺

うと、指示したとおり道の右側を部隊へ向け突き進んでいた。ゴーゴリオと部隊との距離が一気に縮まる。一人の兵士がこちらに気付きライフルの先をゴーゴリオに向けようとする。後ろに向けていた両手を前へと出した。

「イカズチ！」

そう叫ぶと両手から電気が走る。向かう先は兵士の持つライフル銃身を通り弾丸の火薬へと電気が走るとライフルが暴発した。倒れ込む兵士。他の兵士も異変に気付きゴーゴリオへと意識が向かう。意識のあとに銃身をゴーゴリオに向けようとする。だが、それよりも先にゴーゴリオの手から再び電気が他の兵士達のライフルへと向け突き進む。さっきと同じ現象が起きた。兵士がバタバタと倒れていく。右から爆音が聞こえてきた。目を向けると街の者たちがゴーゴリオと同じように兵士のライフルを暴発させていた。ゴーゴリオは兵士への攻撃を続けようとしたが悪寒が体中に走る。倒れた兵士達の向こうで無傷の兵士達が一齐にゴーゴリオへとライフルを向けていた。「まずい！」心の中で叫ぶ。

「カゼ！」

左へ手を向け叫ぶと、体の左側で強い風が起こりゴーゴリオの体を右へと吹き飛ばした。さっきまでゴーゴリオが居たところを弾幕が通り過ぎる。着地の瞬間左足に激痛が走った。足に銃弾が当たったのだらう。だが、それを確認している余裕はない。いくら魔法が使えると言っても放たれた銃弾を止めるだけの力はない。銃撃に対しての最善の対抗策は逃げるだけだった。右を見ると街の者たちの中を銃弾が通り過ぎて、数人が人間から物へと変わり地面に向かつていく。

「カゼ！」

今度は兵士に手を向け叫ぶ。すると、風が起こり兵士達の顔目掛けて進んでいった。兵士達は皆突然の風に目開けていられない。だがその風も長くは続かなく、兵士達は目を開けライフルを構えた。だが、そこにはすでにゴーゴリオの姿はない。兵士達は辺りを見回

しゴーゴリオを探す。ゴーゴリオは街の者を銃撃している兵士達の側にいた。

「イカズチ！」

再びゴーゴリオの手から電気が走り兵士のライフルへと向かう。

「大丈夫か！」

街の者達に声をかけるが、ライフルの暴発の音で声は掻き消される。十人は殺されている。生き残っている者達も恐怖で顔を歪めていた。倒した敵の数もこちらの被害と同じ十人程度だろう。このままでいけばこちらは全滅してしまう。その時、敵の部隊の中央から大きな音が聞こえた。ゴーゴリオにはこの音に聞き覚えがある。デニスが得意の爆発する魔法を使ったのだろう。見ると部隊の中心から兵士達が放射線状に吹き飛ばされていくのが見えた。あれでは中心部にいた兵士は助からないだろうが、吹き飛ばされた兵士達はまだ生きている。

「聞け！お前達の指揮官はここにいる！」

デニスの声が辺りに響いた。見るとデニスの前に一人の男が立っていた。この男がこの部隊の指揮官なのだろう。デニスは指揮官の首筋に誰からか奪ったのか、ピストルを当てていた。サジンの部隊と街の者達は戦闘の手を止め、皆が二人に注目している。

「この部隊を撤退させる。」

デニスは会話するときと同じ音量で指揮官に指示する。指揮官はピストルを向けられている恐怖と部隊の敗北を悟って屈辱の表情をしている。

「わかった。」

戦闘時とは打って変わって静かになったせいで二人の会話は皆に聞こえた。

「撤退だ！本陣へ戻れ！」

デニスにピストルを向けられながら指揮官はこれ以上出ないというだけ声を張った。その声にサジンの部隊は無言で反応する。一斉に街の外へと向かって走り出した。ゴーゴリオは撤退する兵士達を

眺めていた。屈辱の表情をしている者が居る中、安堵の表情をしている者もいた。走りながら悔しい表情で仲間の兵士の遺体を目で追う者がいる。それを見たときゴーゴリオは戦闘の虚しさを再確認させられる。部隊が街の外へ出たのを確認するとデニス是指揮官に向けていたピストルを離した。

「いいぞ。お前も部隊に帰れ。ただし、お前らの大将のところへ連れて行ってもらおう。」

デニスは指揮官に顔を近づけ脅迫する。それを聞いたゴーゴリオはデニスへと駆け寄った。

「デニス！何を考えているんだ。殺されに行くようなものだ！」

ゴーゴリオはデニスに掴みかかった。

「わかってるよ。だが、サジンの本陣が街を攻めてきたらこの街はあっという間にやられてしまうだろう。サジンの本陣を見たか？千人はいる。」

ゴーゴリオはデニスを掴んでいる手を離した。サジンの数を聞き、気持ちが折れそうになるのを必死にこらえていた。

「交渉の場を持ってもらう。何とか戦闘を止めるんだ。犠牲者を減らすためには早いほうが良い。」

「だったら俺も付いて行こう。」

ゴーゴリオにはこの交渉がうまく行くとは思えなかった。サジンとしては戦闘を止める理由などない。このまま多勢でソーキンの街を攻撃すれば多少の被害は出るだろうが制圧することなど簡単だろう。交渉が成立するとも思えなかったし、デニスが無事に帰って来るとも思えなかった。

「駄目だ。俺一人で行く。」

デニスはゴーゴリオの提案を断った。

「死ぬのは一人で良いだろう？」

微笑を浮かべデニスは言った。ゴーゴリオが次の言葉を発しようとしたその時、デニスは動き出した。ゴーゴリオの胸にデニスは手を当てる。

「ボルト・・・」

ゴーゴリオの体に電気が走る。体が痺れ口から発した音が言葉にならない。そして次第に気が遠くなってきた。

「デニス・・・」

ゴーゴリオの意識が遠のいて行くのを確認したのか、デニスは電気を止めたようだった。口から一言ひねり出すことができた。

「俺の家族を頼む」

薄れていく意志の中でデニスの声が遠くで聞こえた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4392q/>

アン サイエンスト

2011年2月2日21時10分発行